

「全鍍連」 2020年7月号 巻頭言

全鍍連 環境副委員長 上村 芳久 (株)ユーミック 代表取締役社長)

「進化は遺伝子コピーミスの結果論」



四国鍍金工業組合の上村です。昨年度より高知の岩崎前理事長よりバトンを渡され組合員の協力を得ながらなんとか一年乗り越えたところです。岩崎氏より「私は10年やりました（やめませんでした）、四国の1期はどうも10年らしいよ」との非情な一言に悩む今日この頃です。

さて、新型コロナウイルスは5月現在でも先が読めない状態の中、県を跨いでの移動自粛もあり四国組合の活動も3月恒例のボウリング大会は中止となり、理事会はweb利用の会議、総会も書面決議と通常運営は叶いませんでした。今回のWeb利用理事会はスマホでのLineビデオ通話で行いました。技術の進歩により便利になったものですが、やっぱり顔を突き合わせて協議しその後は懇親会という流れは捨てがたいものです。リアル理事会と懇親会が出来る日に早く戻ることを願っています。

話しは変わりますが、学校の休校や巣ごもりの影響もあるのでしょうか子ども向け書籍「ざんねんな生き物辞典」シリーズがよく売れているようです。キャッチコピーに「おもしろい！進化のふしぎ」読んだわけではないのですが残念な進化とはあまりにも人間目線だなと思いつつ、進化って気の遠くなるほどの世代を重ねていろんな機能を取り入れていったけど、どの様な仕組みだろう不思議だな…と考えていたところ偶然にも以下の説に遭遇。

『偶然の遺伝子のコピーミスが生じ、結果的にその突然変異の特徴を持つ個体が生存に有利に働く環境下にいたため、たまたま生き残り、その特徴を維持・発展する結果になった生物を後から見て「進化してきた」と呼んでいるだけである』つまりキリンが高い木の葉っぱを食べるために首を長く進化させたのではなく、あくまでコピーミスという偶然の産物でその個体の意思は無いということだ。いくら念ずれば通ずといえども、キリンの先祖が子孫のために首が長くなるよう祈っていたとも家訓を残していたとも思えないのでこれでやっと長年のもやもやが解消された気がします。遺伝子のコピーミスが無ければ原始生命体より先は進めないことになり、進化は気の遠くなるほどの遺伝子コピーミスの賜物で結果論に過ぎず、その裏には適応出来なかったものが山ほどあることになります。

ウイルスは細胞もなく単純すぎて生物とは言えないらしいのですが他の生物の細胞内で増殖するので、ウイルスが現れたのは細胞ができた後のようです。もしかしたら細胞のコピーミスがウイルスなのかも知れません。今回のコロナウイルス禍、業界によっては劇的な変化に見舞われるかもしれませんが、わたしたちはスローガンにもある「変革」を強く意識して乗り越えたいものです。全国大会では多くの方に会える環境になりますように。